

## 歴代誌第二七章 13-14 節 「地を癒す祈り」

### 1A 神の注意喚起 13

### 2A 祈りの答え 14

#### 1B 御民の行うこと

1C へりくだる

2C 祈りを捧げる

3C 御顔を求める

4C 悪の道から立ち返る

#### 2B 主の行われること

1C 天から聞く

2C 罪を赦す

3C 地を癒す

## 本文

歴代誌第二七章を開いてください。先週、1章から5章までを読みましたが、今日は6章から9章までを読みます。今朝は、7章13-14節に注目したいと思います。

13 もし、わたしが天を閉ざしたため雨が降らなくなった場合、また、いなごに命じてこの地を食い尽くさせた場合、また、もし、わたしの民に対して疫病を送った場合、14 わたしの名を呼び求めているわたしの民がみずからへりくだり、祈りをささげ、わたしの顔を慕い求め、その悪い道から立ち返るなら、わたしが親しく天から聞いて、彼らの罪を赦し、彼らの地をいやそう。

私たちは前回、ソロモンが神殿建設を完成させたところまでを読みました。神殿を完成させて、ついにダビデの町に安置してあった神の箱をその至聖所に動かしました。そして、ギブオンにあったモーの幕屋の祭具も移しました。そして、レビ人たちが賛美を、声を一つにして行ったところ、宮に栄光の雲が満ちました。そしてソロモンは、イスラエルの民を祝福し、それから主に祈りを捧げます。

ソロモンは、この神殿の中に神を収めることなど到底できないことを告白します。天も天の天も、神をお入れすることはできません。けれども、ここを罪の赦しのために祈る時、その祈りを聞いてくださる所としてください、と祈ります。ここを祈りの家としてほしい、特に罪を赦しを祈るとき、それを聞いてくださる家としてほしいと祈りました。

初めに、個人と個人の間で事件が起こった時に、その真実が明かされるよう祈りを捧げました。それからは民全体としての祈りを捧げます。敵と戦っている時、彼らが罪を犯しているために敗れた時に、彼らが立ち返ってこの宮で祈りを捧げるなら、その祈りを聞いてください、と言います。それから、罪を犯していて雨が降らないなら、その罪から立ち返ってここで祈るなら、その罪を赦して、雨を降ら

せてください、と祈ります。同じように、飢饉や疫病が発生した場合も、祈りを捧げたら赦してください、と祈りました。さらに、外国人が祈るときも祈りを聞いてくださって、そのことであなたがすべての国民に恐れられるようになりますように、とも祈っています。そして、罪を犯して、敵によって捕虜として捕え移されて、その外国の地で罪を犯したことを言い表し、この宮に向かって祈るなら、その祈りを聞いてくださいますように、と祈ります。

この長い祈りを終わると、全焼のいけにえと数々のいけにえが天からの火によって焼き尽くされました。主が快く、このいけにえを受け入れられたのです。それで、楽器によって主を賛美し、数多くのささげものをして七日間、祭りを行いました。このような、盛大な祭りをを行い、みな主が心に心を向けたこの祝いをソロモンは非常に満足して、そして寝に付いていたのでしょうか、夜に、個人的にソロモンに語りかけがあったのです。主ご自身が、「わたしはあなたの祈りを聞いた。」と答えられました(11節)。すばらしいですね、前回学びましたが、御心にかなった祈りは必ず聞かれます。

### **1A 神の注意喚起 13**

そして 12 節と 13 節の言葉あります。先ほどソロモンが祈った、自然によって起こされる災いについて、雨が降らなかつたり、疫病になつたり、いなごが出てきたりする時、この宮に向かって祈り、神に立ち返るなら、その祈りを聞いてくださいとソロモンが祈ったように、主も、「わたしの名を呼び求めているわたしの民がみずからへりくだり、祈りをささげ、わたしの顔を慕い求め、その悪い道から立ち返るなら、わたしが親しく天から聞いて、彼らの罪を赦し、彼らの地をいやそう。」と言われました。

イスラエルに行くと、「地がいやされる」ということがどういうことか、よく分かります。日本の国土は緑に満ちています。けれども、イスラエルは乾燥しており、その水は非常に貴重です。しかし、その地に緑豊かな畑が広がっており、実に砂漠にも木々が植えられています。パレスチナ自治区とイスラエル領との境が、「グリーン・ライン」と呼ばれますが、パレスチナ自治区の中に入るとすぐに、生い茂った森がなくなって、野生のオリーブの木が所々に生えている黄褐色の土地に変わります。そこに入って初めて、イスラエルの緑土は植林であったことを知ります。

世界中からユダヤ人が帰還して、空の入口であるベングリオン空港に降り立つときに、しばしば見る光景は、タラップから降りて初めにすることは、地面に口づけすることです。彼らは自分がユダヤ人であることとイスラエルの地に住むことは、一つなのです。なぜか？それは主が、ユダヤ人にこの地を与えると約束されたからであり、イスラエルの地が癒されている、木々が植えられていることは、神が彼らに浴して下さっていることの徴であるからです。

主はイスラエルだけでなく、私たち一人一人の人生にも、いやしを与えたいと願われています。神のかたちに造られた人が罪を犯し、そのため私たちは神のかたちから離れて生まれてきました。そして、自分を造られた方の意図されているように生きていないので、その人生という土地にいばらが生え、汗をかき、労しても実が結ばれないという空しさを体験します。けれども主は、「わたしは、あなたをいやす」と約束して下さっているのです。

## 2A 祈りの答え 14

主の約束には、まず私たちがしなければいけないことが書いてあります。四つ書いてありますね、「へりくだる」こと、「祈りを捧げる」こと、「御顔を求める」こと、そして「悪の道から立ち返る」ことです。

### 1B 御民の行うこと

初めに、誰のことについて主が語られているのかに注目してください。「わたしの名を呼び求めているわたしの民」とあります。これは他の訳では、「わたしの名をもって呼ばれているわたしの民(新共同訳)」とあります。主の御名によって呼ばれた主の民ですから、もちろんイスラエルのことです。他の諸国の民ではなく、イスラエルの民のことを話しています。そして、イエス・キリストによって教会も「聖徒たちと同じ国民(エペソ 2:19)」であり、クリスチャンも神の民です。これらの祈りは、クリスチャンが行わなければならないものです。

私たちは、「リバイバル」という言葉を使って多くの人々がイエス様を信じるように祈りますが、初めに目を覚まして立ち上がらなければいけないのは、大ぜいの未信者ではなく、私たちすでに神の民とされた信者たちであります。私たちの周囲が、ちょうどイスラエルの民と同じように、どんどんおかしくなっています。一生懸命農作業をしているのに、実が結ばれずに困っているイスラエル人と同じように、自分の生活がどうもおかしい、前に向かって進んでいるつもりが、また同じところに戻ってきた、というような迷路の中にいるような気分。いろいろ動いているけれども、何か目に見えない壁にぶつかっている。霊的に、自分の生活が前進しているとは思えない、と感ずることがあるでしょう。

それは、主がご自分のところに立ち返るように注意喚起している徴なのです。なんとかして、ご自分のところに引き寄せたいと思われて、何かを起こされます。その音がどんどん大きくなります。そして、大音響のように鳴り響くときもあります。あの「ナルニア国物語」を書いた CS ルイスは、痛みについてこう書きました。「痛みは、いやがおうにも注意喚起をさせる。神は我々の楽しみの中でささやかれ、我々の良心に語られる。しかし、我々の痛みの中では叫ばれる。痛みは耳が不自由な世界を覚醒させる拡声器である。」「Pain insists upon being attended to. God whispers to us in our pleasures, speaks in our consciences, but shouts in our pains. It is his megaphone to rouse a deaf world.」いかがでしょうか、私たちが罪を楽しんでいる時は、「それは良くないんじゃないか？」という良心の声を聞きますが、それは囁きでしかありません。けれども、強い痛みがやってきたら、それは主が大声で語ってくださっています。

### 1C へりくだる

その時に、私たちは初めに「へりくだります」。「主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高くしてくださいませ。(ヤコブ 4:10)」へりくだる、とは何でしょうか？それは、これらの悪いことが起こっているのは主からのものであり、その裁きは正しいと認めることです。自分を正当化したり、周りの環境のせいになしたり、ましてや真理の言葉を告げる者に「聞きたくない！」と拒んだり、悪態をつくことをやめることです。「確かに、これは主からのもので、主は正しい。」とすることです。

北イスラエルにアハブという極悪王がいました。彼はナボテのぶどう畑を欲しがったけれども、断られてふてくされました。それを見たイゼベルが、「あなたは王様でしょ。私があなたのためにナボテの地所を取り上げるわ。」と言って、王の指輪の印を使って、ナボテが神と王を呪ったと偽りの証言を人に言わせて、ナボテを石打ちによって殺したのです。そしてアハブがナボテの畑の中に入ると、エリヤが来ました。「アハブがエリヤに、「あなたはまた、私を見つけたのか。わが敵よ。」と言うと、エリヤは答えた。「あなたが裏切って主の目の前に悪を行なったので、私は見つけたのだ。(1列王 21:20)」アハブはエリヤのことを本当に嫌がっていました。憎んでいました。けれども、エリヤは、アハブが主の前に悪を行ったので、彼の家は子孫が誰一人残ることなく滅ぼされると宣言されました。イゼベルは犬が彼女の死体を食らう、と宣言しました。

この宣言を聞いた時に、彼は次の行動を取ったのです。「アハブは、これらのことばを聞くとすぐ、自分の外套を裂き、身に荒布をまとい、断食をし、荒布を着て伏し、また、打ちしおれて歩いた。(27節)」これまで、怒ったりふてくされていたりしたアハブが、なんとこの裁きの宣言を甘んじて受けたのです。主がそう宣言されたのだから、その通りになろうと受け入れたのです。するとすぐに主が、エリヤに語りかけました。「あなたはアハブがわたしの前にへりくだっているのを見たか。彼がわたしの前にへりくだっているの、彼の生きている間は、わざわざを下さない。しかし、彼の子の時代に、彼の家にわざわざを下す。(29節)」神が憐れんでくださったのです。

へりくだるとは、このように主の裁きをそのまま認めることです。「私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。それゆえ、あなたが宣告される時、あなたは正しく、さばかれるとき、あなたはきよくあられます。(詩 51:4)」ダビデの罪の告白です。人は悔い改めているように見せることがあります。自分が罰せられることに恐れをなして、悔い改めます。けれども、その悔い改めはまた違った形でその罪は出現します。神に罰せられるのが怖いから悔い改めるのは、悔い改めではありません。真実な悔い改めは、「主よ、あなたの正義は全くその通りです。」と、たとえその正義が自分を断罪しようとも、神に栄光を帰する時に与えられるものです。示された罪について、自分は「全くその通りです！」と受け入れるのです。

### 2C 祈りを捧げる

そして祈りを捧げます。前回も学びました、「あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。(ヤコブ 4:2)」とヤコブは言いました。私たちは、あまりにも単純なことをふと忘れてしまいます。祈ればよいのに、思いの中で悩んだり、心の中を騒がせたりして忘れてしまっています。私たちは、祈りを最後の手段(last resort)とするのではなく、最初的手段とすべきですね。主は、私たちに惜しみなく与えようとしていて、ただ私が願うのを待っておられるのです！

### 3C 御顔を求める

そして御顔を求めます。主の顔を求めるとはどういうことでしょうか？まずは、その反対の行為を考えてみましょう。顔を背けることです。それを初めに行ったのは、アダムとエバです。「そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を

避けて園の木の間に身を隠した。(創世記 3:8)」どうしても、目と目を合わせられないのです。自分が主に対して面目が立たない、恥ずかしい、やましいことをしているので顔を合わせられません。

そして、反対に主ご自身が御顔を背けることもあります。レビ記 20 章に、忌まわしいカナン人の習わし書かれています。生まれてきた子を、火で燃やして真っ赤になっているモレクの偶像に、その赤ん坊を置いて殺します。その行いについて、「わたし自身は、その人とその家族から顔をそむけ、彼と、彼にならぬモレクを慕って、淫行を行なう淫らな者をすべて、その民の間から断つ。(5 節)」私が、テレビやインターネットで忌まわしい行いを喜んで見ている時、主ご自身は顔を背けているのだということを考えると、恥ずかしくなります。

したがって、御顔を求めるとは、主と目と目を合わせて、主が何をお感じになっていて、何をお考えになっているのか、じっくりと眺めることです。あるいは、神の右の座におられるキリストから目を話さないことです。「こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。(コロサイ 3:1-3)」

#### 4C 悪の道から立ち返る

そして、「悪の道から立ち返り」ます。私たちが親しんでいた罪を捨てます。「自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。(箴言 28:13)」私たちの心に不義があれば、主は祈りを聞いてくださいません。「もしも私の心にいたく不義があるなら、主は聞き入れてくださらない。(詩篇 66:18)」ですから罪を言い表して捨てるのです。イザヤ書 59 章 2 節には、「あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり」とあります。この仕切りを取り払わないといけません。

悔い改めるといふ言葉は、「思いを変える」というのが元々の意味です。二つの行為があります。悪から立ち返ることです。そして神に立ち返ることです。英語であれば、“Turn from sin”であり、また“Turn to God”であります。このことを同時に行います。神に立ち返ることなくして、悪から立ち返ることはできません。カウンセリングの授業で、先生がこんなことを尋ねました。「白い象を頭の中で思い浮かべてください。」私たちは思い浮かべました。それから、「では、白い象を頭の中から消してください。」そして、「頭の中から、白い象を消すことができた人は何をしましたか？」と尋ねました。多くの人が、「別の色の象を思う」ことによって可能でした。例えば、紫の象を思い浮かべれば、白い象は消えます。つまり、暗闇に打ち勝つには、ただ光を付ければよいだけです。光を付けて、それから暗闇を打ち消すのです。

## 2B 主の行われること

私たちがこれらのことを行なうと、主はご自分の約束をかなえてくださいます。それが三つのことです。一つは「天から親しく聞く」こと。もう一つは、「罪を赦す」こと。そして、「地を癒す」ことです。

### 1C 天から聞く

ここで主が話しておられる「天」は、私たちが見ている上空のことではありません。主の御座のある天であります。この天は、天地が滅び去ろうとも、まったく影響を受けずにそのまま残っているところ です。主は、どんな主権や支配、力にも左右されることなく、まったくそれらものをご自分の手の中に 掌握されておられます。それは、天の御座におられるからです。「なぜ、国々は言うのか。「彼らの神 は、いったいどこにいるのか。」と。私たちの神は、天におられ、その望むところをことごとく行なわれ る。(詩篇 115:2-3)」したがって、私たちがどんな状況の中にいようと、主は私たちが大変だと思っ ている状況などお構いなしに、私たちの祈りを親しく聞くことができになります。

### 2C 罪を赦す

そして私たちの罪を赦してください。これが福音の中核です。どうか、決して忘れてはいけない ことが二つあります。自分は罪を犯した、罪人なんだということです。そして、その罪は悔い改めて、 それから背を向けるなら、主はその罪を決して思い起こすこと泣く、まったく遠くに追いやってしまわ れるということです。「東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離され る。(詩篇 103:12)」これが、東と西で比べていることに注目してください。北が南から離れていると書 いていないのです。東はいつまでも東です。西はいつまでも西です。北は北極があり、南は何極があ りますが、西と東は無限なのです。

そして、ミカ書 7 章 18-19 節にはこう書いてあります。「あなたのような神が、ほかにあるでしょうか。 あなたは、咎を赦し、ご自分のものである残りの者のために、そむきの罪を見過ごされ、怒りをいつ までも持ち続けず、いつくしみを喜ばれるからです。もう一度、私たちをあわれみ、私たちの咎を踏み つけて、すべての罪を海の深みに投げ入れてください。」海の深みに投げ入れてくださいます。海は 浄化作用があると言われていいますね。汚染されたものはそのはるか深くの海底に沈みこませて、地 球全体の掃除をしているとも言われます。聖書においては、死者の住む陰府の入口とされています。 そして悪霊ども、レギオンは、豚にとりつくようにイエス様に命じられ、湖の底に沈めこまれました。罪 のいるべきところに、神はあなたの罪を投げやってください。

そしてイザヤ書 1 章 18 節、「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがた の罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」 ここで知らなければいけないのは、神は徐々に私たちの罪を清めるのではない、ということです。緋 のように赤くても、紅のように赤くても、羊の毛のようになるのです！すべての不義から私たちを清め られるのです。したがって、決して過去の罪、過去の負い目を無用に負わないでください。パウロは、 神の恵みに恐れおののきながら、この自分が、迫害者であった自分が、暴力をふるう者であった自 自分が、罪人のかしらである自分が、神の恵みによって、福音宣教者になっていることを、第一テモテ

1 章で述べています。過去の罪を忘れていてのではありません。むしろ忘れてはいけません。しかし、その記憶はもはや自分を責め立てるものではなく、あまりにも畏れ多い神の恵みを思うためのものになりました。

### 3C 地を癒す

そして、最後に地をいやします。聖書では、罪を犯した後の姿を傷を受けている姿に例えています。預言者エレミヤは、罪を犯し続けているユダの姿を見て、傷だらけの娘のように語っています。「私の民の娘の傷のために、私も傷つき、私は憂え、恐怖が、私を捕えた。乳香はギルアデにないのか。医者はどこにないのか。それなのに、なぜ、私の民の娘の傷はいやされなかったのか。(エレミヤ 8:21-22)」そして、罪の悔い改めもなしに、「大丈夫だよ」と言っている偽預言者に対しては、このように話しています。「彼らは、わたしの民の傷を手軽にいやし、平安がないのに、『平安だ、平安だ。』と言っている。(エレミヤ 6:14)」私たちは条件反射的に、「大丈夫だよ」と言ってしまいますね。これは霊的には間違っています。気軽に傷を癒してはいけません。

しかし、この傷を私たちは癒していただけます。それは同じように傷を受けてくださった方がおられるからです。「しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。(イザヤ 53:5)」イエス様があれだけ痛めつけられました。どうか、この方の打ち傷を見てください。その打ち傷によって、あなたの傷も治り、そして平安が与えられるのです。これまで、人生は傷だらけだったかもしれません。けれども、主の前で、その裁きに服してください。へりくだってください。そうして、祈り、御顔を求め、その罪から離れてください。あなたの傷は甘い恵みの流れで癒されて、いつまでも、いつまでも御霊の癒しは続きでしょう。

多くの人が疑問に思うのは、黙示録 22 章で、新しいエルサレムで、なぜ癒しがあるのか？ということとです。「都の大通りの中央を流れていた。川の両岸には、いのちの木があって、十二種の実がなり、毎月、実ができた。また、その木の葉は諸国の民をいやした。(黙示 22:2)」もう完璧な町であり、新しい体も与えられているのに、なぜ癒しが行われているのか？と思うでしょう。そんなこと言ったら、新しい都でも、イエス様は「小羊」と呼ばれ続けるのです。その打ち傷、打たれた釘の跡を残しながら栄光の姿に輝いておられるのです。私たちは、恵みを永遠に思い出すのです。主が成し遂げてくださった罪の赦しを、いつまでも、いつまでも思い出すのです。その恵みのすばらしさを知るために、その木の葉は役立ちます。

まだ、へりくだったことがない方はへりくだってください。自分の罪が示されることを恐れなくてください。そして罪を示された方は、その罪を捨てて神に叫んでください。そして、主は癒してくださいます。ぜったいに、その罪を思い起こしてあなたを責めるようなことはなさいません。